

新維

御布告往來

編

單



童蒙必讀

二編

維新

御布告往來

東京

思明樓藏版

皇州春
色紫陌

曙光

雪江家書



御布告往來二編

石上古き例は復さる

又一新びる新

此迄時よ大御代の六

合内外隈も無照せ

孩皇威折要能太政官

邪ハ勝難正院を所謂

萬機の政所立法正

立て九省一使能邪何等

明亮の検査して全國

有能并を輔弼の左右院

名も立家弓春秋の富

一年能武部寮各國和親

浪風のまて静るま外務

省珍物奇品疆土有

ゆゑ寶を競合博覧大

會事務司斯も明出度

文明能開化の今不_大

蔵省圓金銀よ世中も

實治を造幣寮民の

竈うまどを賑にぎやく捧さしる貢みつぎ彌い彌や

言ことく収うけ納いれる租そ稅ぜい寮れう

戸こ籍せき寮せうとハ家いえの數かず人にん

別べつ送おとりおま綿めん密みつを調あづて

安あん國こく土ど未ぼん系けい是これ舊ふる稱なづの

法お作さく事じ方ほう第だい宅たく造ぞう立り立た營えい

繕ぜんを掌つうとらら敷し所ところ也なり

志しと士し通う不ふ紙し幣へい寮れう

俗そくハ之これ紙し札さつト云いふ少まじり文ぶん

種ぐト楮ちよ幣へいト云いふ漢かん亦また

之これと鈔せうと云いふ紙しハ神かみ也なり又

上うへ之なり總まじりト貴たか物ものガ札さつハ

金きん銀ぎんヲ換かラシキト融ゆう通つう

自じ在ざいの會かい計けい察さつ尔にトモ

入いりと計けいハ出でセハ敷あはれ

根こん元げんカキハ并なト括くわ要やうの

統計寮誤違の非は様。

改め正以検査寮賢を

撰て交きて友も三の

驛通系は五畿八道哉

統括遐通の限らば玉

綽の及ふ曲め掛也

直如る筆に懈急なく

事速記録寮勸農寮

世の人を大に養ふ基

立る時より遙に勉むるハ

種ハ一粒万倍ある耕の

利を其始の天竺邑君

稲種と天の狭野に植る

より幾千萬の年次経

為ふ益蕃殖し量も盡

ぬ升數と遠野と練の

正算司治世の亂を止れ

古法を器械を備へ陸軍

省殊に教ある家ハ富

國強大兵學子寮務以示

猛勇も怪我の事も必

軍醫寮造兵武庫此兩

司方其龍虎の勇威光

輝二條三條纏め了訴松

の數うずくく 冠かんのの不ふ家かもも空くう為ゐ

裁判さいばん所しよ釋しゃくく 鞆たづな子こ 躰くつたしと

先みづかくく以もつ騎き兵へいのの勇ゆうままりり九

勝かつ不ふ氣きくく 槍やり銃じゆ子こ 步ふ

兵へいがが進しん退たい熟じゆく得とくく 海うみ軍ぐん

省しやう也や 勇ゆう将しやうのの下しもにに弱じやく

率そつがが多たくく 倍ばい一いつ 賢けん人じんとと棟とう

立たつ身しん出で世せいにに 文ぶん部ぶ省しやう

小人匹夫匹女こじん ひつふ びつめ たりきりたりきり

偏執へんしつがが劣りつ編輯へんしん察さつ

正ただ真ま正ただ明めい博はく物ぶつ館かん八はち大だい

學がく區くと稱しょうををふふ一いつ天てん四し

海うみ小こ照しょう液えき旭あさひの昇のぼり東とう京けい

よよわわ庶しよ民みんををここてて好このくく愛あひ知ち

也や如に三さんききをを石いし川がわ流ながせ

初はつ水みづの四よ澤たく了りやう満まん々々

春はる能なり始はじめる大坂おおさかを越こる

五ご常とこ道みち臨みむ何なに處ところも

注しゆ向むかて廣ひろ急いそに猶なほも六む

行ゆく彩いろざれど自然ぜんぜん齡よも

長崎ながさきへ七寶しちほう運うんぶ外國がくわいの

船ふね能なり新あらた瀉くさる

八卦はつぱの青あお森もりの下した

茲こゝ仰あや民たみを多おほ無む學がく

立あせぬ恩めぐみ惠り也。その其人ひと毎ごとり

性せい柔じゆう比ひ之の大だい小せう賢けん也也

とちあ。ぜん善ぜん寺てら設しやう所しよ。神しん儒じゆ

佛ぶつ徒との教けう部ぶ省しやう教けう神しん愛あい

國こく尊そん朝てうの三さん條てう元げん津しんく

雜あ皇うとと神しん官くわん僧そう侶りよ祝むすぶ教けう

小せう登とう了りやう講かう座ざの典てん子し之の藝ぎ

戎えい擗へき出しゅつ生せい子し於を開ひら化くわの

方ま今しん神せき路ろ奉ほう戴たい著しや明ちや也

方ほう便べん本ほん地ち一いち指さし也や

側こもて拍ぱくのの裏うら表あひて方ほう乃なり起おこ汚けの

蚤あひ跡しやくをを洗あらひひ清きよめめぬぬ意い

川かわ小せう流りゆう毛もうくく々々種たね々々

百ひゃくのの匠しやう々々工くわう部ぶ省しやう世よのの為ため

人ひと孔くわう重ちゆう寶ほうをを作おこるる親おや也や

工くわう學がく寮りやう并なら以もつ励れき以もつ勸くわん工くわう寮りやう

孝

儲鑛山孔所轄之掘出

金銀鐵道憲明之於

臺造船案走了目的表

電行察方圓深淺規

矩準繩確乎之心を測

量司海山之り付る何

受又近も恵才せ給ふ徳澤

布告を犯す者あるは

閣を神明在也明きハ

則王法能司法省と理

巨捕子。東西南北四隅。

合しハ八方。閻不務了。

洋燈の焔灼と明法寮之

理非黑白判然と有

友子天下ハ信實太平也

樂阿りて宮内省肉

膳内匠調度能三司十

二能仰妃子皇代の絶

せぬる田地山林曠野

不毛の地洪大より壑々

開拓使力の疆り身一の

啼吾妻ハ名詮自称

今や其音の東天紅皇

居となりし東糸府。

変うハ了マ 賑まきこゑ 弥い 増や 了まさ 呼ひ 了ま 京きやう 教きやう

府ふ 其その 修しゆ 小こ 别べつ 子こ 肉にく 裏うら を

遷うつ 一ひと 江え の 此こゝ 小こ 戸と ぎ ぬ

春はる 平へい と 御ご 代だい 萬まん 歳ざい と 異い

口く 同どう 音おん 人ひと 大おほ 坂さか 府ふ 三さん 津つ

な 何いづれ も 言こと へ 棟むね 上あ の 大おほ

區く 小せう 區く 子こ 番ばん 号ごう 子こ 調てう 密みつ

志し 了り 教きやう 人ひと 家か 子こ 小こ 細まろ 子こ

書うき一う假名曆ごよみハ将まさ一かみん神

心こころ一いつ化くわ一いつ愚祝ぐさつ一いつ惑まどを

如陽曆やうやう一いつ改あらた一いつ理ことわり一いつを

多おほ方かた年とし變かへりぬ子この月つき

が第一だいいち月つきの祝いわい月つき一いつ二ふた五ご七しち

八はち十じゅう十じゅう二に此こゝ七しち月つきハ一いつ月つき

能よ日ひ數かず三さん十じゅう一いち日にち之これをとハ

大おほの月つきとよ云い四よ六む九く十じゅう一いち

此四月を一月三十日之を
小の月と云二月計が
日数廿六日平の月
合しる事三百六十五

丸一年より立返る年
の始を冬より云三月
よりの妻を四月
季と云五月神の

音おとはなき通とよふ鐘かねのね

隙ひまはなき晝ちゆう夜や二十

四時よ古こき禰ねの九く時じゆうを

十二じふに時じゆうはなりて朝あさ夕ゆふ弦げん

六む時じゆうをな今いまもも六む時じゆうを

総まづて時じゆう數かずの遇あひは

從したがふは時じゆう外ほかて音おとの

と即すなはち生なまず水みづ多おほし候あせ

ど一吋の半敷を舊ふるし

稱の九時寸二吋このつちん孔あな

重ちやうぬ是これ八吋やなり其その

他た推おしえ知しるるへき身み

正ただ午う十二じふに吋ちゆうを央なかつ

て他た時ときの前ぜん後ごよふ

王わう分ぶん孔あな髮かみの毛け程ほども

爽すわうきき流りゆう石いし經きやうなり孔あな

午ひ時るよりすぎ程。夜よの十

二時トより。至。也。午後まで。の

何時なんと之これを云い釈よの一

時トあり。午ひ時る前まと午ひ

前ぜん何なん時トと之これを云い同どう何なんの

名なをと。句くつ。之これ釈よト。

夕ゆふと。皆みな一いつ六む畜ちくその

中うち子こ軍ぐん務む校こう七しち曜やう中ちゆう

の日曜日英語この之を

ソングエイと優美ゆより移うつ

時津風ときつ枝えだもなほさぬ

子秋こあきの美み氣き万まん民みん

自主じしゆ自由じゆ外がい不ふ交かう

各國こくごの上うへよ輝かがく日ひ

の奉ほうハ神かみ能のう後ご裔えいの

八百やっ萬まんの四し海かい々々溢あふる

皇威寧大邦昌日

小増了開化の方今

我為之

御布告陸東二海

明治六年癸酉八月

以五味之三為何之入本也

皆十三并胎之月之持之是者

合之儀ハ能書之酒

東京敎社思明樓藏版

天下

慶應

